

## みちのく

## ココロとカラダの癒し旅

青森県十和田市  
【つた 蔦温泉】ブナ原生林の中の  
一軒宿

現在は八戸止まりの東北新幹線だが、いよいよ2010年12月には青森まで延伸開業する。おそらく、北東北の観光客の流れにも変化が生じるのではないか。エリア内有数の観光地である十和田湖や奥入瀬渓流、八甲田山なども、今まで以上のぎわいになるものと思われる。

その意味で、秋田に住む私たちとしては、何度か訪れたことのある十和田湖や八甲田山だとしても、今のうちに一度『新幹線開通前夜の十和田八甲田』を訪ねてみるというのも、一興ではないだろうか。



なんともおもむきのある蔦温泉の玄関周り



ロビーはさながら山小屋のおもむき



帳場前の浴場に続く廊下はノスタルジック



別館廊下

蔦温泉。800年余り昔にはすでに湯治小屋があり、明治42年（1909）の旅館としての開業から数えると今年でちょうど百年という、老舗中の老舗温泉だ。

蔦の原生林の中にぽつんと一軒だけたたずむ、古い木造の建物が主体の温泉旅館。フロントと呼ぶより帳場と呼ぶのが似つかわない玄関あたりのレトロなたたずまい。そして、吉田拓郎の名曲『旅の宿』の歌詞が、実は新婚旅行でこの宿に泊まつた作詞家のインスピレーションから生まれたと聞けば、団塊の世代を中心に、興味をそそられる人も少なくないのでないのではなかろうか。

## 『旅の宿』の歌詞の世界に浸つて

蔦温泉の湯の泉質は、ナトリウム・カルシウム・硫酸塩・炭酸水素塩・塩化物泉。無色透明、無味無臭の、見た目にもきれいな湯だ。特徴的なのは、源泉の真上に直接湯船が組まれているということ。ブナ材で造られた湯船は、底板がわざとすき間を空けて組まれていて、そのすき間から湯が湧き出しているのだ。ときおりブカブカと小さな泡が上がつてくるのも分かる。源泉から湧き出した湯が一度も空気につれないうちに湯船に満たされる：これこそ究極の「源泉掛け流し」だ。当然加熱もしておらず、湯温は平均すると43°Cと高めだ。最初はことさら熱く感じられるが、

時間帯で男女別になる「久安の湯」



男女別の「泉響の湯」。蔦温泉の浴場はいずれも源泉の上に直接造られている



刺激の少ない湯でもあり、慣れてくるとなかなか心地いい。



本館から別館に続く60段の階段。これも鳴温泉の名物

宿泊棟は、木造で大正7年築の本館、地形に沿って60段の階段を上った高台に建てられた昭和35年築の木造の別館、そして鉄筋コンクリートの近代的な造りの西館とある。快適さを求めるなら西館になるだろうが、あえて本館や別館をチョイスして、古い時代にタイムスリップしたようなノスタルジックな温泉旅を楽しむのも風流というものではないだろうか。それはまさに吉田拓郎の『旅の宿』の世界。空いている時であれば、『旅の宿』を作詞した岡本おさみの泊まった別館の客室を指定することもできる。

## 十和田や奥入瀬にも立ち寄つて

文学好きの方の中にはご存知の方もおられるかも知れないが、鳴温泉は檀一雄の長編小説『火宅の人』にも登場する。昭和31年8月、桂一雄(檀一雄本人)一行は鳴温泉に泊まるのだが、その日は満館で、やむを得ず大広間で一夜を明かすことになるのだ。そうして、小説

西館の客室のみトイレ付きで夕食は部屋食になる



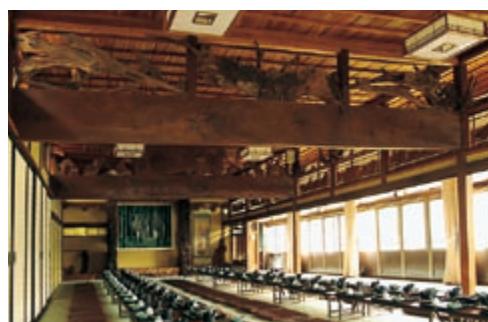
作詞家の岡本おさみが新婚旅行で泊まった別館の部屋。ここで『旅の宿』の歌詞が生まれた。部屋には色紙がかかっていた

はここからがいよいよ佳境に入る。

機関利用ならJR花輪線鹿角花輪駅または十和田南駅から路線バスの乗り継ぎ、マイカーの場合も十和田湖・奥入瀬渓流を経由することになるので、途中の観光も楽しみたいもの。

夏休みや紅葉シーズンは特に込むので、時期をずらして平日を狙つてみるのもいいだろう。

(文・写真)かとう・りゅうえつ(秋田市)



小説『火宅の人』で桂(檀一雄)たちはこの大広間で一夜を明かす



八甲田山中で神秘的なたたずまいを見せる鳶沼



秋田から鳶温泉を目指すと必然的に十和田湖と奥入瀬渓流を通る



津軽の海の幸山の幸が並ぶ夕膳。連泊客には毎夜献立が変わる

## 鳶温泉

T S U T A O N S E N

〒034-0301

青森県十和田市奥瀬鳶野湯1

Tel.0176-74-2311 Fax.0176-74-2244

<http://www.thuta.co.jp>

お一人様(1泊2食付き・夏期料金 4/16~11/30)

本館 10,650円より(税・サ込)

別館 8,550円より(税・サ込)

西館 12,750円より(税・サ込)

【施設のご案内】 ●定員全館で200名様

■本・別館 ●客室26室 ●宴会場80畳

●大浴場(男2・女1) ●ロビー ●売店

■西館 ●客室24室(全室トイレ付・内バス付4室)

●宴会場88畳 ●レストラン80席



「鳶鍋」(青森の地鶏シャモロックと  
山の芋の鍋)